

沖ノ島出土鏡の再検討

重住（福嶋）真貴子・水野敏典・森下章司

1. 宗像大社所蔵鏡の来歴と整理の経緯

宗像大社は三宮からなり、沖ノ島に沖津宮（宗像市大島）、大島に中津宮（宗像市大島）、本土に辺津宮（宗像市田島）が鎮座する（図1）。現在、宗像大社が所蔵する鏡には、古代の沖ノ島祭祀に関わる鏡と、中津宮・辺津宮の祭祀で奉納された鏡があり、すべて辺津宮に保管されている。

古代の沖ノ島祭祀に関わるものには、学術調査で祭祀遺跡から出土したものと、学術調査で出土したものではないが沖ノ島出上の可能性が高いとみられるものがあり、前者を学術調査出土品として、後者を伝沖ノ島出土品として保管している。これらの沖ノ島出土品は併せて約8万点を数え、現在、すべて国宝に指定されている。沖ノ島学術調査は、宗像大社復興期成会が昭和29年から昭和46年にかけて3回実施したもので、沖津宮周辺の巨岩群に23ヶ所の古代祭祀遺跡（図2）と膨大な量の奉納品が発見された。第3次調査までに、学術調査出土鏡と伝沖ノ島出土鏡を併せた沖ノ島出土鏡は計54面確認されている（宗像大社復興期成会1979 524頁）⁽¹⁾。

これまでに、学術調査出土鏡以外の銅鏡については詳細を公にする機会はなかった。これらは、沖ノ島祭祀遺跡ひいては宗像大社の祭祀全体を検討する際に不可欠であるため、本章では、個々の把握に必要となる来歴と、資料を扱う際に参考となる学術調査後の整理作業について述べる。

（重住）

（1）伝沖ノ島出土鏡について

現在、宗像大社（以下、大社と表す）が伝沖ノ島出土品として保管する鏡は計15面である。伝沖ノ島出土品は様々な経緯で伝来しており、各々の来歴によって、沖ノ島で発見後辺津宮へ移されて保管してきた「移管品」、沖ノ島から外に流出して個人蔵となった後に大社へ返納された「旧個人蔵品」、「来歴不詳品」というように整理できる。伝沖ノ島出土鏡もそれぞれに分類される（表1）。

移管品 伝御金蔵発見品・沖津宮社務所発見品にわけられる。

伝御金蔵発見品は、御金蔵で不時発見されたものと伝えられ、学術調査よりずっと以前から辺津宮へ移管されていた品をさす。

沖津宮社殿の左奥には巨岩の重なりによって自然に作られた洞穴状の空間がある。ここは江戸時代には「御金蔵」と称され、同時代に著わされた記録によって、沖ノ島祭祀遺跡の中で最も早くから知られていた場所である。御金蔵は、第1次調査で4号遺跡と名付けられた⁽²⁾。第3次調査では、この洞穴が5世紀、6世紀には祭場として使用され、平安時代以降は祭祀奉納品を再収納する収納庫として機能したことを確認し、また、島内の他

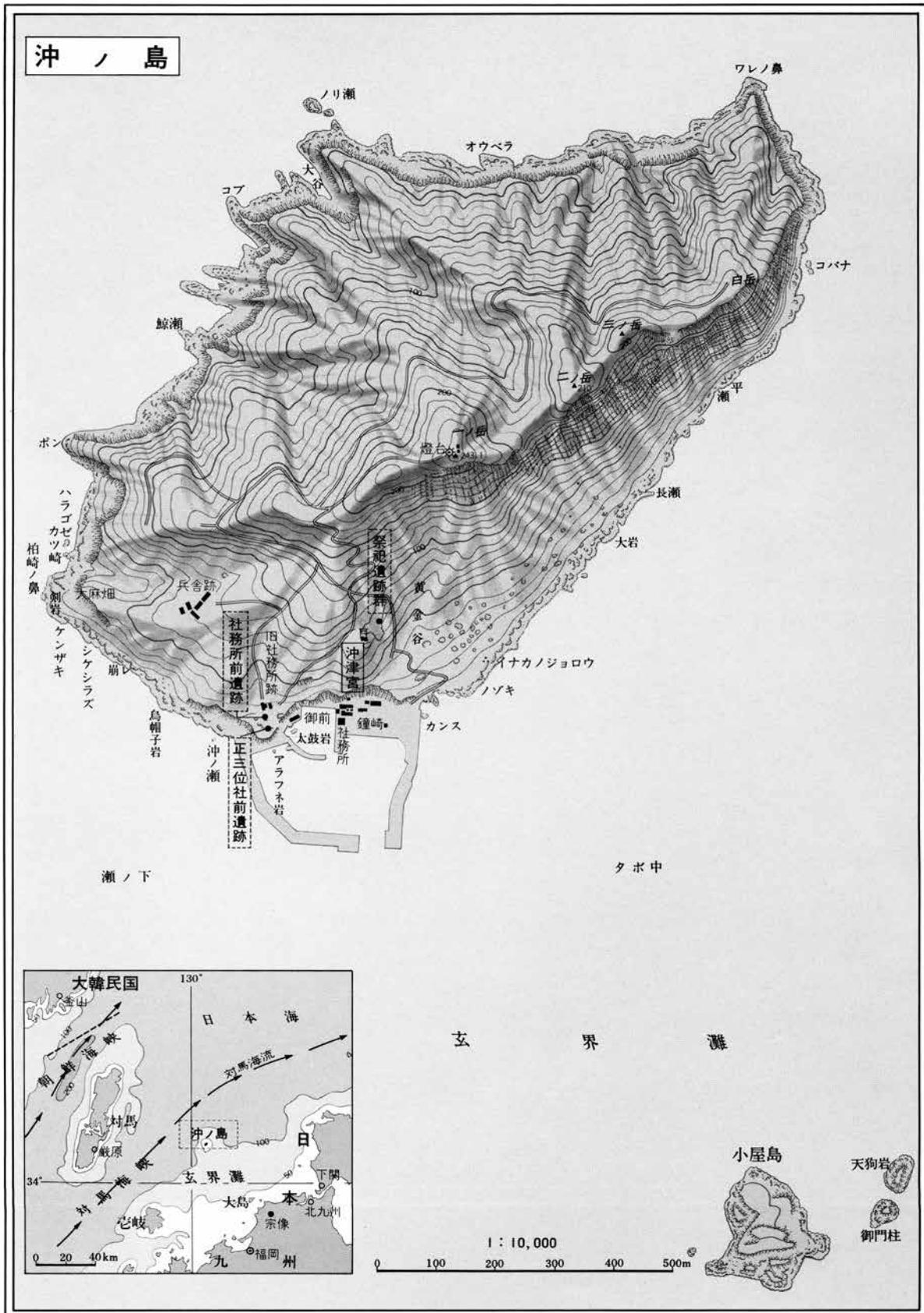


図1 沖ノ島とその位置

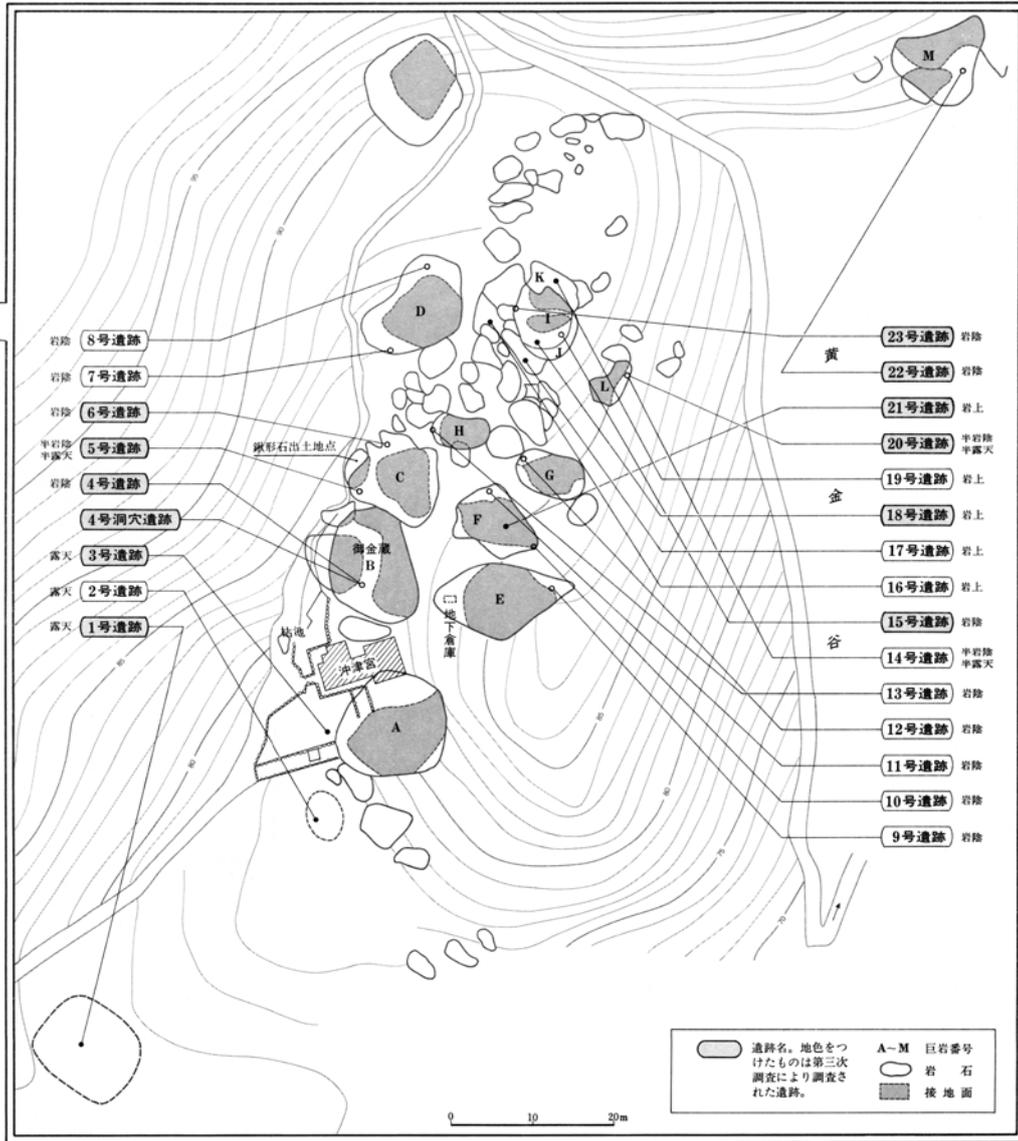


図2 沖ノ島の遺跡配置

表1 宗像大社所蔵の伝沖ノ島出土鏡の内訳と来歴

名称	整理番号	伝沖ノ島出土鏡			
		移管品		旧個人蔵品	来歴不詳品
		伝御金蔵 発見品	沖津宮 社務所発見品		
獣帯文方格規矩四神鏡	伝-2	1			
三角縁三神三獸鏡	伝-3	1			
方格規矩渦文鏡	伝-4			1	
三角縁三神三獸鏡	伝-5			1	
変形魚文帯神獸鏡	伝-6-1			1	
双頭龍文鏡	伝-6-2		1		
四乳渦文鏡	伝-7-1			1	
鈕片	伝-7-2			1	
四乳渦文鏡	伝-7-3			1	
三角縁神獸鏡片	伝-7-4			1	
変形四神四獸鏡	伝-8-1	1			
乳文鏡	伝-8-2	1			
変形獸形鏡	伝-8-3	1			
珠文鏡	伝-9-1				1
変形神獸鏡	番号なし				1

の祭祀遺跡で偶然露出して採集されたものも神宝としてこの洞穴へ収納したと推測している（宗像大社復興期成会1979 155・163頁）。

伝御金蔵発見品のうち、鏡は、獣帯文方格規矩四神鏡（伝－2）、三角縁三神三獸鏡（伝－3）、変形四神四獸鏡（伝－8－1）、乳文鏡（伝－8－2）、変形獸形鏡（伝－8－3）の5面からなり、このほかに金銅製高機、香炉状品、銅盤、滑石製模造品（人形・馬形・舟形・子持勾玉・円板・白玉）、宋銭、石斧、土器などがある。これらは第1次調査開始までにいくつかの学術報告でふれられ存在が知られてきた⁽³⁾。

沖津宮社務所発見品は、ある時期に沖津宮社務所内で存在が確認され、辺津宮へ移管された品をさす。該当する鏡は双頭龍文鏡（伝－6－2）1点のみで、本鏡は近年大社職員によって沖津宮社務所内で確認されたものである。

本鏡以外に、第1次調査の際に沖津宮社務所内で存在が確認され調査出土品とともに辺津宮へ移管された一群がある。該当品は金属製の馬具や装身具で、7号遺跡出土品と形態・構造が等しい馬具や帯先金具を多く含むことから、沖ノ島の祭祀遺跡から表面採集され沖津宮社務所へ運び込まれて保管されてきたものと推定されている（宗像神社復興期成会1958 132頁、139－146頁、宗像神社復興期成会1961a 235頁）。大社では、この一群について、第1次調査で7号遺跡出土品と結論付けられたものを7号遺跡出土品として保管し、それ以外を伝沖ノ島出土品として保管している。

旧個人蔵品 該当する鏡は、方格規矩渦文鏡（伝－4）、三角縁三神三獸鏡（伝－5）、変形魚文帯神獸鏡（伝－6－1）、四乳渦文鏡（伝－7－1）、鈕片（伝－7－2）、四乳渦文鏡（伝－7－3）、三角縁神獸鏡片（伝－7－4）である。

そのうち、変形魚文帯神獸鏡（伝－6－1）を除く鏡6面（伝－4、伝－5、伝－7－1～4）は福岡市のコレクターの旧蔵品で、一連のものに武器（鉄矛・鉄鏃）、鉄斧、貝製雲珠、滑石製模造品（子持勾玉・白玉・円板）、玉類、金属製雛形円板などがある。この一群に含まれる鏡3面は、第3次調査で21号遺跡から出土した鏡片一獸文縁亘子孫銘獸帯鏡（21－1－1）、変形格子目文鏡（21－1－2）、変形鼉竜鏡（21－1－3）と接合した。これらは、現在、復元して一個体になっている。また、この一群のほとんどは21号遺跡や18号遺跡と関係をもつものとされている。この一群はすべて『宗像沖ノ島』に「付記 新出資料」として収録されている。一方、変形魚文帯神獸鏡（伝－6－1）は前述とは別の旧個人蔵品で、沖ノ島の漁港築堤工事関係者の持ち出しにかかるものである⁽⁴⁾。

来歴不詳品 該当する鏡は、珠文鏡（伝－9－1）と変形神獸鏡（整理番号なし）である。珠文鏡（伝－9－1）は来歴を示す付属資料がないが、本調査で珠文鏡（7－2）と同範・同型の鏡と判明した。変形神獸鏡（整理番号なし）は『宗像沖ノ島』収録の参考図版Ⅲ鏡〈4〉－（3）に「伝沖ノ島出土」と掲載されている。来歴不詳品は鏡以外にも武器・馬具・工具・金属製雛形品・有孔貝製品・玉類・滑石製模造品など各種ある。いずれも詳しい来歴はわからないが、伝沖ノ島出土品として辺津宮で保管してきたものである。

この他に、銅鏡片（伝－28－82）は、大社はこれまで伝沖ノ島出土品として保管してきたが、本調査で、鼉龍鏡（17－15）、変形六獸帯鏡（17－19）、擬銘帯画像鏡（17－21）の同一個体と判明し、17号遺跡出土の銅鏡片であることを確認した。（重住）

(2) 中津宮・辺津宮の祭祀に関わる奉納鏡・出土鏡

現在、大社では、古代の沖ノ島祭祀に関わる鏡の外に、海獣葡萄鏡2面（ともに整理番号なし）、変形獣帯鏡2面（第三宮-1、第三宮-2）を収蔵している。これらは大社の中津宮・辺津宮の祭祀に関わる奉納鏡とみられる。

海獣葡萄鏡は大小各1面ある。大型の海獣葡萄鏡の来歴は、沖ノ島の御金蔵発見品とする説あるいは辺津宮奉納品とする説など大社の内部において異同があったようだが、明治25年の調査と思われる『宗像神社宝物模写図三冊』のうち中津宮の分冊には「古鏡壹面径七寸」として海獣葡萄鏡の図が描かれ「黒田忠之奉納ト云傳フ」と記されている。したがって、本鏡は江戸時代に福岡藩主第二代黒田忠之が中津宮へ奉納したもので後に辺津宮へ移管されたものとみられる⁽⁵⁾。一方、小型の海獣葡萄鏡は来歴不詳である。

変形獣帯鏡2面（第三宮-1、第三宮-2）は辺津宮第三宮址からの出土品である。辺津宮社殿の南南西には丘陵があり南方の高い方を上高宮、その北側の一段低い丘陵を下高宮^{みや}といい、両者が連なる山丘は社家の伝承では古来より宗像三女神の降臨の聖地とされている⁽⁶⁾。第三宮址は下高宮の丘陵から東北のほうへ突出した土地の突端にあった小さな丘とされる。本鏡2面は、昭和10年頃に行われた県道拡張工事の折に盛土用としてこの小丘を切崩した際、滑石製短甲や須恵器・土師器とともに見つかったものである（田中1938、宗像神社復興期成会1961b 18-19頁、宗像大社復興期成会1979 485頁）。（重住）

(3) これまでの整理

第3次調査後、大社が行った学術調査出土品・伝沖ノ島出土品の整理の経過について述べる。

沖ノ島出土品は、昭和56年から平成4年まで保存修理事業が行われた。伝沖ノ島出土品を含む全ての沖ノ島出土品を可能な範囲で遺跡毎に仕分けし、その状態で修理業者へ搬出、修理が終わると立体品以外は製品毎にまとめてテグスで桐板に留められ、大社へ納入された。桐板は遺跡単位にまとめられ収納箱に保管された。この保管状況は現在も変わっていない。

続いての整理は、沖ノ島出土品の国宝一括指定事業時である。平成18年6月、古墳時代から平安時代中期までの沖ノ島祭祀に関わる出土品は伝沖ノ島出土品も含める形で一括国宝指定を受けた⁽⁷⁾。本指定へ向けて、大社は平成15年から整理作業を行い、出土品の全容を把握するための資料作成にあたった。当時、これらの出土品の資料台帳がなかったため、遺跡毎にまとめていた桐板の個々に番号をふり、この番号を基に遺跡毎で出土品の内訳と数を割り出し、審議用の資料を作成した。なお、この時に作成した整理番号を本稿でも用いている。

現在も出土品の整理は継続中で、資料台帳の完成を目指して鋭意取り組んでいる。近年は社外にある伝沖ノ島出土品の所在確認や調査をしながら、整理、検討を進めている。現在までに確認した社外の推定沖ノ島出土鏡として、個人蔵の獣文縁宜子孫銘獣帯鏡（21-1-1の同型鏡）1面がある⁽⁸⁾。（重住）

(4) 鏡の三次元形状計測と整理

平成19年～平成21年、奈良県立橿原考古学研究所による三次元形状計測を進めてゆく一方で、基礎作業として宗像大社に保管されている各鏡のチェックと再検討を行った。重住、水野、森下を中心に、完形鏡から破片に至るまで各資料を1点1点確認していった。その結果、いくつかの新しい知見も得ることができた。ここに検討結果の一端を報告し、確認した銅鏡を一覧表として提示する。

沖ノ島祭祀遺跡の発掘調査の成果は3冊の調査報告書に詳細にまとめられ（以下、『沖ノ島』、『続沖ノ島』、『宗像沖ノ島』の略称を用いる）、出土鏡についても丁寧に報告されている。また宗像大社神宝館において、これらの資料はきわめてよく整理された状態で保管されており、報告との照合も容易であった。ただし、前にも触れたように、報告書に掲載されていない資料や、検討の結果、新しく種類を判別できた資料もある。鏡は、沖ノ島祭祀遺跡を評価する上で重要な役割を果たしてきており、その全体を示すことに意義を認める。

なお3冊の報告書は、発掘調査毎にまとめられているため、一遺跡の出土品が複数の報告にまたがって記述されているものも多い。上記の国宝一括指定に伴う整理作業において重住が作成した、遺跡ごとの出土鏡一覧表に基づき、その整理番号を利用して報告する。

（森下）

2. 新たに種類が判明した鏡

宗像大社所蔵資料を1点1点確認、整理してゆく過程で、接合や破片の検討結果により、新たに鏡の種類や出土位置が判明したものがある。

a 伝沖ノ島出土獣帯文方格規矩四神鏡（伝-2 『沖ノ島』図版第49-（1））と18号遺跡発掘鏡片（18-5-4 『宗像沖ノ島』PL.95-3）が接合。

獣帯文方格規矩四神鏡が18号遺跡の出土品と確定した。沖ノ島では、このように典型的な漢鏡は1例のみとなる。

b 7号遺跡出土の鏡片（7-3-1 『沖ノ島』図版第51-（3））が、8号遺跡の盤龍鏡（8-2-3 『続沖ノ島』図版第89-（1））と同型品であることが判明。

8号遺跡の盤龍鏡は報告書では後漢末の漢鏡と位置付けられてきたが、小林行雄のいう「同型鏡群」となる可能性が高まった（小林1965）。同型鏡群は、中期後半から後期の古墳に多く副葬され、韓国武寧王陵からも出土している。7・8号遺跡の主たる祭祀年代とも矛盾しない。ただし「盤龍鏡」は同型鏡群では初例。

c 伝沖ノ島出土変形魚文帯神獸鏡（伝-6-1 未報告資料）と伝沖ノ島出土の三角縁神獸鏡片（伝-7-4 『宗像沖ノ島』PL.120-1）が同範・同型品であることを確認。奈良国立博物館蔵坂本不言堂コレクションにも同範・同型品あり。

d 7号遺跡出土珠文鏡（7-2 『沖ノ島』図版第51-（1））と伝沖ノ島出土珠文鏡（伝-9-1 未報告資料）が同範・同型鏡であることが判明（徳田氏）。

e 21号遺跡出土獣文縁冑子孫銘獸帯鏡（21-1-1 『宗像沖ノ島』PL.121-3）と同型品で、推定沖ノ島出土とされる個人蔵鏡を調査。検討の結果、沖ノ島出土品とみてよい。

f 4・7・8・18・21号遺跡出土の鏡片を検討。一部の種類を同定した。（森下）

3. 沖ノ島出土鏡・関連鏡の整理結果

各鏡について、整理番号（「4-1-1」など）、名称、径、重量、報告書掲載箇所（報告書名・図版・図面ほか）の順でまとめた。

■は1面と数えうるもの、□は他と接合した銅鏡片ないし同定不能の銅鏡片、○は関連資料を示す。

鏡の名称は、各報告書に記載のものを使用したか、一部改称したものをふくむ。

径と重量は、報告書の記載に誤りがなければそのまま採用し、報告書に記載がなく本調査で計測したものは〔 〕で示した。本調査で計測した法量は保存修理を終えた状態であるため、本来のものとは異なる。また、破片については省略した。

(1) 学術調査出土品

1号遺跡 1面

■ 1-1 八稜鏡片

1点 約10cm（復元径）『宗像沖ノ島』PL.31-（2）・FIG.27

縁部の破片。文様は不明。周縁が蒲鉾状に盛上る。

4号遺跡（御金蔵） 4面分

■ 4-1-1 外区片

1点 『宗像沖ノ島』PL.65-1・FIG.63-3の右

外側から櫛歯文・波文・櫛歯文となる外区片。後期の仿製鏡。

■ 4-1-2 唐式鏡片

1点 14～15cm（復元径）『宗像沖ノ島』PL.65-2・FIG.63-2

唐式鏡の外区片。中央の剥離部は文様があったところか。破面は錆びており、古い割れ口。

□ 4-1-3 変形文鏡片

1点 『宗像沖ノ島』図版なし・FIG.63-1

外側から円文・櫛歯文・櫛歯文。7号遺跡（7-3-a）と8号遺跡（8-2-1）と同一個体。

■ 4-1-4 鈕（珠文鏡）

1点 『宗像沖ノ島』図版なし・FIG.63-3の左

小型の鈕の破片。鈕脇に珠文が3点残る。仿製の珠文鏡。

■ 4-1-5 外区片

1点 『宗像沖ノ島』図版・図面なし

外側から櫛歯文・櫛歯文・波文・線文（S字状）となる外区片。後期の仿製鏡。

7号遺跡 3面分

■ 7-2 珠文鏡

9.2cm〔94.1g〕『沖ノ島』図版第51-（1）・第22図-5・鏡鑑明細表

外区は乱雑な櫛歯文・波文。内区は多数の珠文で埋める。伝-9-1と同範・同型品と判明。後期の仿製鏡。数片に破碎し一部を欠失していたが、現在は接合・復元している。

■ 7-3-1 盤龍鏡片

破片多数『沖ノ島』図版第51-(3)・図面なし

報告書では「平縁鏡」と一括されていた鏡片であったが、検討と接合作業の結果、その中に8号遺跡の盤龍鏡(8-2-3)と同型品の破片があることが判明。ただし、破片はあまり接合しない。外区は櫛歯文・櫛歯文。盤龍の一部や神仙像がみられる。

■ 7-3-2 界圈片

2点『沖ノ島』図版第51-(3)・図面なし

断面三角形の界圈状の破片。斜面は櫛歯文。外側に線表現の文様。前期の仿製鏡の鈕座や三角縁神獸鏡の界圈に例あり。

□ 7-3-a 変形文鏡片

3点『沖ノ島』図版・図面なし

4号遺跡(4-1-3)と8号遺跡(8-2-1)と同一個体。

□ 7-3-b 銅鏡片

5点(2点は接合)『沖ノ島』図版第51-(3)・図面なし

縁は一方の面が丸みを帯びる。鏡の破片かどうか不明。

□ 7-3-c 細片

多数『沖ノ島』図版第51-(3)・図面なし

同定不能。やや厚みのある銅製品の破片をふくむ。盤龍鏡(7-3-1)の破片もふくむもの。

8号遺跡 3面分

■ 8-2-1 変形文鏡

10.0cm [81.1g] 『沖ノ島』図版第51-(2)・第22図-6・鏡鑑明細表

外区は外側から円文・櫛歯文・櫛歯文。内区は巴文。内区外周に半円。後期の仿製鏡。欠損部が多く、復元してある。破片が4号遺跡(4-1-3)、7号遺跡(7-3-a)の破片に含まれる。

なお、第1次調査では、本鏡は8号遺跡から大島中学校への移管品であった時期があると報告されている(宗像神社復興期成会1958 68頁)。

■ 8-2-2 変形方格規矩鏡

14.1cm [237.2g] 『沖ノ島』図版第49-(2)・第22図-2・鏡鑑明細表

外区は線表現の渦文。内区外周に櫛歯文・擬銘帯。内区は方格規矩の間に渦文化した獸文を入れる。前期の仿製鏡。変形文鏡(8-2-1)とは鍔の状態がまったく異なる。

■ 8-2-3 盤龍鏡

11.6 [10.4] cm 215g 『続沖ノ島』図版第89-(1)・第108図

厚い縁部をもち、外区は二重の櫛歯文。内区は2頭の向かいあう獸像の脚元に、臼を搗いて薬を調合する仙人の姿を描く。鍔上がりは良好であるが、鍔の進行によって傷んだ部

分が多い。

報告書では後漢末の漢鏡と位置づけていたが、7号遺跡出土鏡（7-3-1）が本鏡と同型品であることが判明し、古墳時代中期後半～後期の古墳に副葬される同型鏡群に属する可能性が高まった。

15号遺跡 1面

■15-1 六神六乳鏡

9.2cm [91.0g] 『宗像沖ノ島』PL.118・FIG.119

外区は鋸歯文、文様帯は櫛歯文。内区は6個の乳の間に神像を1体ずつ表す。前期後半の仿製鏡。

16号遺跡 4面

■16-1 変形三角縁三神三獣鏡

20.5cm [677.1g] 『沖ノ島』図版第50-(2)・第22図-4・鏡鑑明細表

仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号249。同範鏡番号119。18号遺跡に同範・同型品(18-2)。外区は三角縁で線描の鋸歯文と波文。内区外周は9個の乳の間に各種の図像を入れる。内区は6個の乳で区分し、神像と獣像を交互に配する。

■16-2-1 変形方格鏡

9.1cm [101.0g] 『続沖ノ島』図版第75-(1)・第88図-1

いわゆる方格T字鏡（松浦1983・1994）。外区は波文・鋸歯文。内区は方格とT字文と乳で構成。仿製鏡とされているが、魏晉鏡の可能性が高い。

■16-2-2 変形内行六花文鏡

6.9cm [28.6g] 『続沖ノ島』図版第75-(2)・第88図-2

外区は素文。文様帯に櫛歯文をめぐらし、主文は六花の内行花文。前期の仿製鏡。

■16-2-3 素文雛形銅鏡

3.0cm [7.7g] 『沖ノ島』図版第51-(4)・第22図-7・鏡鑑明細表

小型の素文鏡。鈕は板状。

17号遺跡 21面

■17-1 変形夔鳳鏡

22.1cm 785g 『続沖ノ島』図版第33・第28図・表2の番号(21)

外区は縁が小さな斜縁状で、二帯の内向鋸歯文。続けて雲文と鳥文を2体ずつ交互に配した連弧文がめぐる。内区は宝珠形の四葉によって4つに区画され、四葉の中に横向きと振り返りの龍を置き、四葉の間には相向う夔鳳を置く。それぞれの夔鳳の頭上には「富」「冝」「子」「孫」の吉祥銘を入れる。鈕は円形鈕孔で平たい。

鏡背面は全体的に模糊としていて、内区の一部はうまく文様表出されず「孫」の字が消えている。縁の2箇所が凹み、縁から鈕へ長い亀裂がある。なお、18号遺跡に文様や特徴が酷似する鏡片5点がある（18-5-3参照）。

■17-2 変形鳥文縁方格規矩鏡

27.1cm 1535g 『続沖ノ島』図版第19・第9図・表2の番号(1)

外区には鳥文と鋸歯文。内区外周は櫛歯文と断面が蒲鋒形の有節文がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画され、隙間に渦文化した虎文や鳥文を配す。方格内に獣脚状の図像がめぐる。極めて鑄上がりが良い。

■17-3 変形半円方形帯方格規矩鏡

26.2cm 1510g 『続沖ノ島』図版第21・第10図・表2の番号(2)

外区は二重の鋸歯文。内区外周は櫛歯文、鋸歯文の界圈、半円方形帯がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画し、渦文化した虎文、鳥文を配する。縁から鈕に向って入る亀裂が2箇所あり、大きく歪む。

■17-4 擬銘帯方格規矩鏡

22.1cm 850g 『続沖ノ島』図版第22・第11図・表2の番号(3)

外区は鋸歯文・珠文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文・擬銘帯がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画され、渦文化した虎文と鳥文を置く。

■17-5 変形方格規矩渦文鏡

21.5cm 1030g 『続沖ノ島』図版第23- (4)・第12図・表2の番号(4)

外区は鋸歯文・波文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文・擬銘帯がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画するが、表現や配置に歪みがめだつ。主文様は渦文と小弧線で構成される。

■17-6 変形珠文帯方格規矩鏡

16.6cm 380g 『続沖ノ島』図版第24- (6)・第14図・表2の番号(6)

外区は二重の鋸歯文。内区外周は櫛歯文・複線に挟まれた珠文帯がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画され、鳥文を向かい合う形で配す。内区の一部を鑄掛けしている。

■17-7 変形菱雲文縁方格規矩鏡

17.8cm 530g 『続沖ノ島』図版第23- (5)・第13図・表2の番号(5)

外区は菱雲文と鋸歯文。内区外周は櫛歯文がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画され、間に渦文化した虎文を相対させて配す。方格とTLV字文の表現や配置に歪みがみられる。

■17-8 変形内行十花文重弧鏡

18.7cm 605g 『続沖ノ島』図版第25・第16図・表2の番号(8)

浅い匙面の平縁で、外区は素文。外から内へ櫛歯文、内行十花文、櫛歯文、雲雷文、櫛歯文がめぐり、通常の内行花文とは花文と雲雷文の位置が入れ替わっている。鈕座は五葉で内側に櫛歯文が入る。花文間と五葉間はそれぞれ重弧文で埋めている。

■17-9 擬銘帯内行八花文鏡

17.6cm 675g 『続沖ノ島』図版第26- (9)・第17図・表2の番号(9)

平縁で、外区は鋸歯文。外側から順に乳をもつ擬銘帯、櫛歯文、内行八花文がめぐる。鈕座は四葉で回りに凸面の圈帯がある。

■17-10 変形内行八花文鏡

17.0cm 545g 『続沖ノ島』図版第26- (10)・第18図・表2の番号(10)

平縁で、外区は素文。内区外周は櫛歯文・珠文・雲雷文・珠文をめぐらす。主文は内行

八花文。花文の間に変形した結紐文を入れて、雲雷文の円圈を乳に変えている。鈕の周囲を珠文と凸面の圈帯で囲む。縁から鈕へかけて大きく亀裂が入り一部を欠失している。

■17-11 変形唐草文帯三神三獸鏡

24.3cm 1140g 『続沖ノ島』図版31- (18)・第25図・表2の番号 (18)

仿製三角縁神獸鏡。京大目録番号204。同範鏡番号103。外区は三角縁で、鋸齒文・波文・鋸齒文がめぐり、10個の小乳を配す。内区外周は櫛齒文・唐草文・波文・界圈がめぐり、10個の乳を配する。内区は6個の乳で区画され、間に浮彫の神像と獸像を交互に配置する。神像は肩・膝が張ったものとなで肩のものと二種類ある。獸像は顔が横向きで二重顎を持つ。乳の上には松毳文様を配す。鈕座は有節重弧文。縁の4箇所から亀裂が入り、鏡面が歪んでいる。鑄型の傷が多くみられる。

■17-12 変形唐草文帯三神三獸鏡

21.6cm 600g 『続沖ノ島』図版第32- (19)・第26図・表2の番号 (19)

仿製三角縁神獸鏡。京大目録番号244。同範・同型鏡は知られていない。外区は三角縁で、線描の鋸齒文と波文。内区外周は唐草文がめぐり、8個の乳を配す。内区は6個の乳で区画され、神獸像を3体ずつ置いたとみられるが、文様表現はわからない。鑄上がりが極めて悪く、文様の表出が不良で鈕の一部が欠失している。鑄型の傷みによる凹凸がめだつ。

■17-13 変形魚文帯神獸鏡

20.0cm 610g 『続沖ノ島』図版第32- (20)・第27図・表2の番号 (20)

仿製三角縁神獸鏡。京大目録番号253。同範・同型鏡は知られていない。外区は三角縁で、線描の鋸齒文と波文。内区外周は9個の乳・魚・蛙・唐草を組み合わせた獸文帯と突線の界圈がめぐる。内区は一部の文様がうまく表出されず、乳1個が欠失しているが、本来、6個の乳で区画されたとみられる。神像3体を連続して置き、それらに接して獸像様の図像2体を置いている。神獸の表現は区別が明確ではない。鈕座は突線。縁の一部に亀裂が生じている。

■17-14 擬銘帯龍鏡

12.9cm 260g 『続沖ノ島』図版第28- (12)・第20図-12・表2の番号 (12)

外区は鋸齒文・波文・鋸齒文。内区外周は櫛齒文と擬銘帯がめぐる。内区は4個の乳で区画され、長短2つの胴部をもつ龍と線表現となった巨を4組配する。外区の内側の段に凹凸や歪みがめだつ。

■17-15 龍鏡

23.7cm 955g 『続沖ノ島』図版第27・第19図・表2の番号 (11)

外区は菱雲文と怪鳥文。内区外周は界圈と半円方形帯がめぐる。内区は4個の乳で区画され、長い胴部をもつ龍と巨を銜む小獸像を4組配する。鈕座は有節重弧文。怪鳥文には長い亀裂があり、2箇所欠失している。伝-28-82の鏡片中に本鏡の怪鳥文帯の鏡片2点を確認した。

■17-16 変形七獸帯鏡

16.7cm 290g 『続沖ノ島』図版第29- (14)・第21図・表2の番号 (14)

外区は鋸齒文・珠文・鋸齒文。内区外周に櫛齒文、鋸齒文を施した界圈、櫛齒文、擬銘

帯がめぐる。内区は4個の乳で区画され、それぞれに1頭もしくは2頭の鳥頭状の獣像と、胴から分離した鬣龍鏡系の頭部表現を配する。鈕座は櫛歯文。鈕の部分は圧力によって変形して盛り上がり、亀裂が生じている。

■17-17 変形文鏡

10.0〔10.4〕cm 115g 『続沖ノ島』図版第28- (13)・第20図-13・表2の番号(13)

外区は鋸歯文のみ。内区外周は櫛歯文・擬銘帯がめぐる。内区は4個の乳で区画され、それぞれに獣像が著しく変形したとみられる表現の文様を配する。

■17-18 変形半円方形帯画像鏡

22.0cm 840g 『続沖ノ島』図版第30・第23図・表2の番号(16)

外区は菱雲文。内区外周に櫛歯文、鋸歯文を施した界圈、珠文と複合鋸歯文を入れた半円方形帯、断面が蒲鋒形の有節文がめぐる。内区は4個の乳で区画され、脇侍を従えた神像と2頭の獣像をそれぞれに対置する。鈕座は櫛歯文。縁の2箇所から鈕へ向って亀裂が入っている。

■17-19 変形六獣帯鏡

16.4cm 385g 『続沖ノ島』図版第29- (15)・第22図・表2の番号(15)

外区は鋸歯文・波文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文と擬銘帯がめぐる。内区は6個の乳で区画され、各区画に横向きに獣像を配する。鈕座は有節重弧文。全体が7片に破碎し、内区の2箇所を欠失している。本調査では、伝-28-82の鏡片中に本鏡の特徴をもつ鏡片1点を確認した。

■17-20 変形素文帯方格鏡

18.0cm 630g 『続沖ノ島』図版第24- (7)・第15図・表2の番号(7)

外区は素文。内区外周は櫛歯文、乳と円環と斜行線が合わさった雲雷文風の文様帯、櫛歯文、凸面の圈帯がめぐる。内区は方格とT字文で区画し、間を弧線で埋めている。鈕は長方形鈕孔で鏡背面からやや浮いた位置にある。縁部の形状、鈕孔の特徴から魏晋鏡の可能性が高い。縁の2箇所から鈕へ向って亀裂が入っている。

■17-21 擬銘帯画像鏡

15.0cm 『続沖ノ島』図版第31- (17)・第24図・表2の番号(17)

外区は鋸歯文。内区外周は櫛歯文と擬銘帯がめぐる。内区は4個の乳で区画され、神像や獣像が変形した文様表現を各区画に交互に配したものとみられる。内区の破損が著しく、内区と外区が分離している。本調査で、伝-28-82の鏡片中に本鏡内区の破片の多くを確認したが、現在も内区の半分を欠失している。

18号遺跡 10面分

■18-1 四神文帯二神二獣鏡

22.2cm 1050g 『続沖ノ島』図版第42・第63図・表19の番号(1)

三角縁神獣鏡。京大目録番号91。同範鏡番号50。外区は三角縁で、鋸歯文・珠文入りの波文・鋸歯文、斜面に鋸歯文。内区外周は櫛歯文・獣文・鋸歯文の界圈がめぐる。獣文は「天」「王」「日」「月」の方格銘と4個の乳で8つに区分され、四神や獣その他の図像を間

に配す。内区は4個の振文座乳で区画され、脇侍を従えて巨に座す2体の神像と、顔が横向きで巨を衝む2体の獣像を対置する。空隙には傘松形文様を載せたひきがえると鳥、蓬萊山、博山炉などを配す。鈕座は有節重弧文。鑄上がり、遺存状況は良好である。

■18-2 変形唐草文帯三神三獣鏡

20.6cm 730g 『続沖ノ島』図版第46-(4)・第64図-4・表19の番号(4)

仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号249。同範鏡番号119。16号遺跡に同範・同型鏡(16-1 変形三角縁三神三獣鏡)あり。三角縁に続いて外区は鋸齒文・波文、内区外周に9個の乳と線描きの獣文をめぐらす。内区は乳で区切り神獣像を配する。全体として表出不良で文様が見えないところが多い。内区の乳1個と鈕の四分の一が表出されていない。

■18-3 変形三神三獣帯鏡

23.4cm [798.5g] 『続沖ノ島』図版第45-(2)・第64図-2・表19の番号(2)

仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号240。同範・同型鏡は知られていない。外区は三角縁で、鋸齒文・波文・鋸齒文。内区外周は乳で区切り、魚・蛙・四足動物などの獣文、突線の界隈がめぐる。内区は6個の乳で区画され、間に神像と獣像を3体ずつ交互に置いたとみられる。神像は膝を張り、獣像は頭部表現が横向きと側面形の二種類がある。乳の上に松毬文様を配す。鈕座は突線に連珠。部分的に文様表出が不良。全体が5片に破砕し、五分の一ほどを欠失していたが、現在は接合・復元している。

■18-4 変形三神三獣帯鏡

20.9cm [594.7g] 『続沖ノ島』図版第46-(3)・第64図-3・表19の番号(3)

仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号237。同範・同型鏡は知られていない。外区は三角縁で、鋸齒文・波文・鋸齒文。内区外周は斜行櫛齒文、乳で区切り、魚・蛙などの獣文がめぐる。内区は、本来、6個の乳で区画し、間に神像と獣像を3体ずつ交互に置いたとみられる。神像は二股状の胴部。獣像は頭部が縦向き、胴が横向きである。鑄型の傷みによる文様の崩れが激しい。縁2箇所から亀裂が生じ、四分の一を欠失している。

■18-5-1 獣文鏡片

2点 1点は『宗像沖ノ島』PL.95-1の下・FIG.92-1の上 もう1点は図版・図面なし 頭部を正面に向けた獣像の破片。屈曲する胴部をもつ。獣像の脇を縁取る突線が特徴。三角縁神獣鏡と報告されたが、仿製鏡の可能性が高い。香川県赤山古墳出土の仿製盤龍鏡に獣像頭部表現の近い例あり(瀬戸内海歴史民俗資料館1983 41頁)。

■18-5-2 外区片

1点 『宗像沖ノ島』PL.95-1の上・FIG.92-1の下

比較的整った波文と鋸齒文からなる外区の破片。小さな段をもち、その内側の櫛齒文が残る。研磨は丁寧。18-5-1の外区でもよいが、鑄肌はやや異なるか。報告では三角縁神獣鏡とされたが、その外区を思わせる雰囲気はある。

■18-5-3 変形夔鳳鏡片

5点 22cm(推定復元径) 『宗像沖ノ島』PL.95-2・FIG.92-2

17号遺跡の変形夔鳳鏡(17-1)と酷似する夔鳳鏡の破片。同範・同型の根拠は得られず。半円文の表出が2片間で異なる。伝宮地嶽付近の古墳出土の破片(鈴木基親氏旧蔵、鈴木

氏売却にて現在所在不明（梅原1966）と同一個体とみる考えもある（宗像大社復興期成会1979 307・308頁、花田1999）。

■18-5-4・伝-2 獣帯文方格規矩四神鏡

18.0cm [451.3g 伝-2のみの重さ]

18-5-4:『宗像沖ノ島』PL.95-3・FIG.93 伝-2:『沖ノ島』図版第49-(1)・第22図-1・鏡鑑明細表

18-5-4は第3次調査における18号遺跡の出土品で、鈕と方格、T字部分の一部の破片1点。伝-2は、伝御金蔵発見品（豊1939 第1図-2）とされてきた獣帯文方格規矩四神鏡で、両者が接合し、同一個体であることが判明した。両者を接合した状況で資料提示。

外区は平縁で、獣文。内区外周は櫛歯文、銘帯がめぐり。銘は「尚方作竟真大巧 上有□□□□□ □□玉泉飢食棗」で、末尾に鳥文を置く。内区は方格とTLV字文で区画され、隙間に線描で四神やその他の獣像を配したとみられる。方格には乳と十二支銘を入れ、T字文の両脇には円座乳を置く。鈕座は蝙蝠形の四葉で、間に小葉を1個ずつ入れる。

■18-5-5 鈕

1点 『宗像沖ノ島』PL.95-4・図面なし

よく研磨された鈕。鈕孔は円。18-5-1の鈕でもよい。

■18-5-6・伝-7-2 銅鏡片・鈕片

18-5-6:15点（うち2点は接合）『宗像沖ノ島』210頁に出土地点のみ説明あり

伝-7-2:1点 『宗像沖ノ島』PL.120-5・図面なし

18-5-6は第3次調査における18号遺跡出土品で、伝沖ノ島出土で旧個人蔵の鈕片（伝-7-2）と、錆があまり進行せず、黒っぽい色で、表面が模糊とした特徴が共通する。18-5-6の1点と伝-7-2が接合する可能性もあり、確証はないが同一個体と解釈・配置して資料提示。

鈕頂が平らで、鈕座に接して浮彫表現の獣像があり、横倒しの頭部がみえる。仿製の盤龍鏡か。18-5-6の銅鏡片中には他に錆の異なる破片もふくむ。うち2点は薄い縁部の破片。

19号遺跡 2面分

■19-1 変形内行八花文鏡

24.8cm [1008.5g] 『続沖ノ島』図版第63・第72図

平縁で外区は素文。内区外周に櫛歯文・雲雷文・櫛歯文をめぐらし、主文は内行八花文。雲雷文の円圏を乳に変えて、花文の間に変形した結紐文を入れている。鈕座は四葉で回りに櫛歯文で挟む圏帯と珠文帯がめぐり。

■現存しない 鏡片

第1次第4回調査で、19号遺跡の東端I号巨岩とK号巨岩の空隙で鋸歯文のある鏡片1個を実見したが、その後見当たらなくなったとある（宗像神社復興期成会1961a 178頁）。

21号遺跡 6面分

■21-1-1 獣文縁冑子孫銘獣帯鏡

17.6cm [487.7g] 『宗像沖ノ島』PL.103-5 (鈕座片)・PL.121-3・FIG.101-1 (鈕座片)・FIG.157-1

外区は獣文縁・鋸齒文、内区外周には櫛齒文をめぐらす。内区は欠失部分が多いが、7個の乳で区分し、神像や各種の獣像を置く。鈕座には「孫」字と渦文を配する。いわゆる同型鏡群。古墳時代中期後半～後期の古墳に副葬される。現在知られている本鏡の同型品出土地は下の通り。

大部分が出土地点不明の旧個人蔵品であったが、第3次調査で出土した鈕座の破片と接合し、本来の出土遺跡が確定した。現在では接合・復元してある。21-2-aに本鏡の鈕座の小乳部分の破片あり。

現在個人蔵の別の1面の同型鏡(推定沖ノ島)も、本鏡と鏄の共通性から21号遺跡の出土品と推定されている(宗像大社復興期成会1979 520頁)。

同型鏡出土地：韓国・慶尚南道 熊本・国越 宮崎・持田(伝) 宮崎・持田1号 宮崎・山ノ坊(2) 福岡・沖ノ島21号(推定) 奈良・藤ノ木 三重・木ノ下 愛知・笹原

■21-1-2 変形格子目文鏡

11.7cm [58.6g] 『宗像沖ノ島』PL.103-3 (外区片)・PL.120-6・FIG.101-3 (外区片)・FIG.157-4

外区は櫛齒文・櫛齒文・複合鋸齒文(波文が崩れたもの)、内区は乳脚文。後期の仿製鏡。

大部分は個人の旧所蔵品であったが、第3次調査で21号遺跡から出土した外区の破片と接合したことから、本来の出土遺跡が確定した。現在の復元状態は『宗像沖ノ島』図版とは異なる位置に破片が接合されている。21-1-bと21-2-bは本鏡と同一個体。

■21-1-3 変形龍鏡

13.0cm [104.6g] 『宗像沖ノ島』PL.103-1左2点(内区片)・PL.120-4・FIG.101-4(内区片)・FIG.157-3

外区は複合鋸齒文・鋸齒文、内区外周に櫛齒文と鋸齒文を施した界圏をめぐらす。内区は神獣像状の変形した図像で、乳がないのが特徴。前期の仿製鏡。21号遺跡の他鏡とは年代が異なる。また鏄の状況も違いが大きい。半分あまりが欠損し、外区の半分を復元してある。21-1-aは本鏡と同一個体。

大部分は個人の旧所蔵品。第3次調査で21号遺跡から出土した破片と接合したことから、21号遺跡の出土品であることが確定した。

■21-1-14 小型鏡

『宗像沖ノ島』PL.103-4・FIG.101-2

素文か。小型の鈕の周囲に圏線。あまり研磨されていない様子。

□21-1-a 変形龍鏡片

1点 『宗像沖ノ島』PL.103-1右1点(PL.120-4には入っていない)・図面なし
変形龍鏡(21-1-3)の内区の破片。

□21-1-b 変形格子目文鏡片

7点 一部は『宗像沖ノ島』PL.103-2・図面なし
変形格子目文鏡(21-1-2)の外区ほかの破片。

□21-1-c 銅鏡片

4点 『宗像沖ノ島』 図版・図面なし
文様不明。

■21-2-1 縁部片

3点 『宗像沖ノ島』 図版・図面なし
薄い縁部の破片。

■21-2-2 小型素文鏡

[2.0-2.3cm] [3.4g] 『宗像沖ノ島』 PL.103-6・FIG.103-1
文様のない小型鏡。

□21-2-a 獣文縁冑子孫銘獣帯鏡片

1点 『宗像沖ノ島』 図版・図面なし
獣文縁冑子孫銘獣帯鏡 (21-1-1) の鈕座の小乳の破片。

□21-2-b 変形格子目文鏡片

1点 『宗像沖ノ島』 図版・図面なし
変形格子目文鏡 (21-1-2) の内区の破片。

□21-2-c 銅鏡片

8点 『宗像沖ノ島』 図版・図面なし
文様不明。

23号遺跡 1面

■23-1 珠文鏡

6.0cm [24.3g] 『宗像沖ノ島』 PL.117-(2)・FIG.120-1

外区は鋸歯文一帯。内区外周に櫛歯文をめぐらす。内区は一列の珠文。四分の一を欠失している。

(2) 伝沖ノ島出土品

■伝-3 三角縁三神三獣鏡

21.7cm [802.3g] 『沖ノ島』 図版第50-(1)・第22図-3・鏡鑑明細表

伝御金蔵発見品 (豊1939 第1図-1)。三角縁神獣鏡。京大目録番号124。同範鏡番号77。外区は三角縁で、鋸歯文・波文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文・珠文を入れた波文と界圏がめぐる。界圏の表現は同範・同型鏡と異なる。内区は6個の乳で区画され、間に神像と顔が縦向きの獣像を3体ずつ交互に配す。獣像の前方にある乳下には線描の渦文、波文、魚を置く。鈕座は円圏と有節重弧文で一部はうまく表出されていない。文様帯の一部を欠失するが、復元している。

■伝-4 方格規矩渦文鏡

24.8cm [845.0g] 『宗像沖ノ島』 PL.121-4・FIG.155

旧個人蔵品。外区は渦卷文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文と擬銘帯がめぐる。内区は方格とTLV字文で区画され、隙間に渦文化した虎文と鳥文を配す。方格内には渦文・珠文を入

れ、四葉座をおく。鈕座付近の欠失箇所は小孔（貫通）となっている。内区から文様帯にかけての欠失箇所は復元している。

■伝-5 三角縁三神三獣鏡

21.8cm [708.0g] 『宗像沖ノ島』PL.121-1・FIG.156-4

旧個人蔵品。仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号214。宮崎県西都原13号境に同範・同型鏡あり。外区は三角縁で、鋸歯文・波文・鋸歯文。内区外周は櫛歯文、10個の乳で区切られ、魚・鳥・蛙・獣面などをふくむ獣文帯、鋸歯文の界圏がめぐる。内区は6個の乳で区画され、間になで肩の神像と顔が横向きで一重顎をもつ獣像を3体ずつ交互に配す。2個の乳下に松毬文様を置く。鈕座は有節重弧文。外区が2箇所欠失していたが復元している。鑄型の傷がめだつ。

■伝-6-1 変形魚文帯神獣鏡

[20.8cm] [548.8g] これまでの報告書に掲載なし

旧個人蔵品。仿製三角縁神獣鏡。京大目録番号255。坂本不言堂コレクション（現奈良国立博物館蔵）に同範・同型鏡あり（樋口・林2002 210頁）。本調査で、伝沖ノ島出土鏡片（伝-7-4三角縁神獣鏡片）が同範・同型鏡であることを確認した。外区は三角縁で、線描の鋸歯文・波文。内区外周は9個の乳で区切って魚・唐草を組み合わせた獣文帯がめぐる。内区は5個の乳で区切り、神像と獣像をそれぞれの区画に配することを意図したものとみられるが、神獣の区別が明確ではない。鈕座は突線。鑄型の傷がめだつ。縁から内区へ向って亀裂と欠損部があり、補修してある。

■伝-6-2 双頭龍文鏡

[9.1cm] [79.8g] これまでの報告書に掲載なし

沖津宮社務所発見品。外区は素文。内区外周は斜行櫛歯文と二重細線がめぐる。内区は鈕を挟んで縦に長い銘帯「位至」「三公」によって左右に二分される。主文様として双頭龍文と思われる崩れた獣像を左右に1個ずつ置くが、文様表出が不良で文様表現はよくわからない。

■伝-7-1 四乳渦文鏡

12.1 [11.7] cm [123.9g] 『宗像沖ノ島』PL.120-2・FIG.156-3

旧個人蔵品。『宗像沖ノ島』520頁では付着する土などから21号遺跡の出土と推定。仿製の獣文鏡。外区は鋸歯文・波文・鋸歯文、外区外周に櫛歯文、内区は4個の乳の間に崩れた獣文を配する。古墳時代中期の仿製鏡。外区に欠損。

■伝-7-3 四乳渦文鏡

8.5 [8.1] cm [46.0g] 『宗像沖ノ島』PL.120-3・FIG.156-1

旧個人蔵品。『宗像沖ノ島』521頁で「鏄などからみて、21号遺跡出土と推定しておこう」とされる。外区は鋸歯文、内区外周に櫛歯文、内区は4個の乳の間に渦状文を配する。外区に欠損。

■伝-7-4 三角縁神獣鏡片

1点 『宗像沖ノ島』PL.120-1・FIG.156-2

旧個人蔵品。『宗像沖ノ島』519頁では鏄と付着する土から18号遺跡の出土と推定。外区

と文様帯の一部の破片。伝沖ノ島出土鏡（変形魚文帯神獸鏡 伝-6-1）と同範・同型品と考えられ、文様の一致する場所も特定した。京大目録番号255。坂本不言堂コレクション（現奈良国立博物館蔵）にも同範・同型鏡（樋口・林2002 210頁）あり。

■伝-8-1 変形四神四獸鏡

8.9cm [120.4g] 『沖ノ島』第23図-10・鏡鑑明細表 『続沖ノ島』図版第102-（2）

伝御金蔵発見品（豊1939 第1図-5）。外区は渦巻と櫛歯文。内区は8個の小乳と線文。後期の仿製鏡か。外区の一部を欠く。

■伝-8-2 乳文鏡

9.3cm [84.4g] 『沖ノ島』第23図-9・鏡鑑明細表 『続沖ノ島』図版第102-（3）

伝御金蔵発見品（豊1939 第1図-4）。外区は鋸歯文と波文。内区は小乳の周りにΩ状の線表現。中期後半～後期の仿製鏡。

■伝-8-3 変形獸形鏡

12.2cm [171.7g] 『沖ノ島』第23図-8・鏡鑑明細表 『続沖ノ島』図版第102-（1）

伝御金蔵発見品（豊1939 第1図-3）。外区は鋸歯文・波文・鋸歯文、内区外周は擬銘帯、内区は六獸文。乳なし。

■伝-9-1 珠文鏡

[8.8cm（推定径）] [57.8g] これまでの報告書に掲載なし

来歴不詳品。珠文鏡（7-2）と同範・同型品と判明。7-2よりも残存状況がよく、文様も鮮明。斜縁を呈し、外区は乱雑な櫛歯文・波文。内区は多数の珠文で埋める。後期の仿製鏡。外区と文様帯の多くを欠く。

□伝-28-82 17号遺跡出土の銅鏡片

22点。伝沖ノ島出土鏡として保管されてきたが、17号遺跡出土鏡の破片と判明。発掘調査時にふるい掛けによって回収されたものか。17-15・17-19・17-21の項参照。

■整理番号なし 変形神獸鏡

14.1cm [284.3g] 『宗像沖ノ島』「祭祀遺物の考察」参考図版Ⅲ鏡〈4〉-（3）・図面なし

来歴不詳品。外区は鋸歯文・波文・鋸歯文、内区外周は櫛歯文と珠文、内区は6個の乳で区分し、神像と獸像を配する。外区の一部を欠く。

（3）参考資料

伝御金蔵（所在不明品）

■乳文鏡

11.2cm 『沖ノ島』第23図-11・鏡鑑明細表

外区は櫛歯文・櫛歯文、内区外周に擬銘帯をめぐらし、内区主文は巴文らしい。

豊元国によって、御金蔵に現存する唯一の古鏡として報告されているもの（豊1939 第1図-6）。第1次調査では、沖ノ島で紛失と報告されている（宗像神社復興期成会1958 68頁）。

推定沖ノ島21号遺跡（社外品）

■獸文縁冝子孫銘獸帯鏡

17.6cm [639.8g] 『宗像沖ノ島』 PL.121 - 2・FIG.157 - 2

個人蔵品。21号遺跡出土鏡(21-1-1)と同型鏡。外区は獣文縁・鋸齒文、内区外周には櫛齒文をめぐらす。内区は7乳で区分し、各種の獣像を置く。鈕座には「冝」「子」「孫」字と渦文を配する。

大社の調査で、本鏡は、大社が伝沖ノ島出土鏡として保管する旧個人所蔵品の一群(方格規矩渦文鏡(伝-4)、三角縁三神三獣鏡(伝-5)、四乳渦文鏡(伝-7-1)、鈕片(伝-7-2)、四乳渦文鏡(伝-7-3)、三角縁神獣鏡片(伝-7-4))と、かつて一連のものとして所有されていたことがわかっている。本調査では、鏡背面の錆の様子が21号遺跡出土鏡(21-1-1)と共通することを確認した。したがって、沖ノ島21号遺跡出土の可能性が高いとみられる。

推定沖ノ島(社外品)

○六花連弧文鏡

10.0cm 『宗像沖ノ島』 308頁・FIG.150 - 1

以下3面は「昭和35年(1960)ごろ、福岡市のある家で、宗像大島村で購入したという鏡、玉類、石製品をみせてもらったことがある」「昭和31年(1956)8月、大島村の波止場工事現場付近で土工ふうの人より購入したもの」(宗像大社復興期成会1979 308頁)として紹介されたもので、その後、焼失したともいわれ、現在所在不明。掲載された拓本によると外区は素文、内区外周は櫛齒文・珠文?、主文は六花文の仿製内行花文鏡。

○四乳櫛齒文鏡

7.9cm 『宗像沖ノ島』 308頁・FIG.150 - 2

外区は鋸齒文、内区外周は櫛齒文・擬銘帯?、主文は4個の乳と捩文。

○素文雛形鏡

3.5 ~ 3.9cm 『宗像沖ノ島』 308頁・FIG.150 - 3

小型の素文鏡。

○画文帯同向式神獣鏡・変形獣帯画像鏡

伝宮地嶽付近古墳出土(梅原1966、財団法人東洋文庫1993)。大英博物館所蔵。推定沖ノ島は花田勝広によるが、確証はまだない(花田1999)。

辺津宮第三宮址

○第三宮-1 変形獣帯鏡

8.5cm [71.0g] 『続沖ノ島』 第48図 - (1)

外区の一部と内区の大半を欠失するが、復元してある。図柄は盤龍鏡。外区は鋸齒文、内区外周には櫛齒文、主文は向い合う頭部が残る。中国鏡と考えられる。

○第三宮-2 変形獣帯鏡

15.1cm [247.7g] 『続沖ノ島』 第48図 - (2)

外区と内区の一部を欠失するが、復元してある。文様は朦朧としているが、外区は珠点入りの波文、内区外周に櫛齒文をめぐらし、主文は線表現の鳥文。その内側に斜行櫛齒文

と二重の圏線をめぐらし、鈕座に四葉文を置く。鈕孔は長方形を示し、魏晉鏡の可能性が高い。

以上2面は宗像大社辺津宮第三宮址出土となるもの（田中1938、宗像神社復興期成会1961b 18-19頁、宗像大社復興期成会1979 485頁）。

奉納鏡

○整理番号なし 海獣葡萄鏡

[22.1cm] [1399.5g] 『宗像沖ノ島』図版 参考I-伝沖ノ島遺物の下(91頁)

伝中津宮宝物。江戸時代に福岡藩主第二代黒田忠之が中津宮へ奉納したもので後に辺津宮へ移管されたものと思われる（『宗像神社宝物模写図三冊』ほか）。

外区には禽獣文と変形葡萄唐草文をめぐらし、内区主文は六獣と葡萄唐草文。鈕は伏獣形。高野山北室院と個人蔵の同型品が知られている（勝部1996 130頁、小窪・菅野1987 図73）。

○整理番号なし 海獣葡萄鏡

[16.5cm] [1078.0g] これまでの報告書に掲載なし

伝宗像大社奉納鏡。来歴不詳。

外区は禽文と葡萄唐草をめぐらし、内区は各種の獣像を6個置く。龍形鈕。個人蔵品に同型品が知られている（勝部1996 141頁）。
(重住・森下)

4. 沖ノ島出土鏡の分類案

銅鏡の分類についてはいろいろな考え方があるが、ここでは仮の分類案として以下のように大別し、沖ノ島出土鏡全体の傾向をみることにしたい。

なお伝もふくめて沖ノ島出土鏡と考えられるものに限って示している。

分類別 沖ノ島出土鏡一覧

漢鏡

18号遺跡 獣帯文方格規矩四神鏡（伝-2と18-5-4が接合）

三国鏡

16号遺跡 変形方格鏡（16-2-1） *いわゆる方格T字鏡

17号遺跡 変形夔鳳鏡（17-1） *特異な形式の夔鳳鏡

17号遺跡 変形素文帯方格鏡（17-20） *類例が中国出土鏡にあるわけではないが特徴から

18号遺跡 変形夔鳳鏡片（18-5-3） *17号遺跡の夔鳳鏡と酷似

伝沖ノ島 双頭龍文鏡（伝-6-2） *漢代でもよい

三角縁神獣鏡（古墳時代前期）

16号遺跡 変形三角縁三神三獣鏡（16-1） *仿製三角縁神獣鏡18-2と同範・同型

17号遺跡 変形唐草文帯三神三獣鏡（17-11） *仿製三角縁神獣鏡

- 17号遺跡 変形唐草文帯三神三獸鏡 (17-12) * 仿製三角縁神獸鏡
 17号遺跡 変形魚文帯神獸鏡 (17-13) * 仿製三角縁神獸鏡
 18号遺跡 四神文帯二神二獸鏡 (18-1)
 18号遺跡 変形唐草文帯三神三獸鏡 (18-2) * 仿製三角縁神獸鏡16-1と同範・同型
 18号遺跡 変形三神三獸獸帯鏡 (18-3) * 仿製三角縁神獸鏡
 18号遺跡 変形三神三獸獸帯鏡 (18-4) * 仿製三角縁神獸鏡
 伝沖ノ島 三角縁三神三獸鏡 (伝-3)
 伝沖ノ島 三角縁三神三獸鏡 (伝-5) * 仿製三角縁神獸鏡
 伝沖ノ島 変形魚文帯神獸鏡 (伝-6-1) * 仿製三角縁神獸鏡 伝-7-4と同範・同型
 伝沖ノ島 三角縁神獸鏡片 (伝-7-4) * 仿製三角縁神獸鏡 伝-6-1と同範・同型

同型鏡群 (古墳時代中期後半～後期)

- 7号遺跡 盤龍鏡片 (7-3-1) * 8-2-3と同型 7-3-cに同一個体破片
 8号遺跡 盤龍鏡 (8-2-3) * 7-3-1と同型
 21号遺跡 獸文縁冝子孫銘獸帯鏡 (21-1-1) * 個人蔵の推定沖ノ島出土品と同型
 21-2-aに同一個体破片
 推定沖ノ島 獸文縁冝子孫銘獸帯鏡 (個人蔵) 21-1-1と同型

仿製鏡 (古墳時代前期～中期はじめ)

- 8号遺跡 変形方格規矩鏡 (8-2-2)
 15号遺跡 六神六乳鏡 (15-1)
 16号遺跡 変形内行六花文鏡 (16-2-2)
 17号遺跡 変形鳥文縁方格規矩鏡 (17-2)
 17号遺跡 変形半円方形帯方格規矩鏡 (17-3)
 17号遺跡 擬銘帯方格規矩鏡 (17-4)
 17号遺跡 変形方格規矩渦文鏡 (17-5)
 17号遺跡 変形珠文帯方格規矩鏡 (17-6)
 17号遺跡 変形菱雲文縁方格規矩鏡 (17-7)
 17号遺跡 変形内行十花文重弧鏡 (17-8)
 17号遺跡 擬銘帯内行八花文鏡 (17-9)
 17号遺跡 変形内行八花文鏡 (17-10)
 17号遺跡 擬銘帯鼉龍鏡 (17-14)
 17号遺跡 鼉龍鏡 (17-15) * 伝-28-82に同一個体破片
 17号遺跡 変形七獸帯鏡 (17-16)
 17号遺跡 変形文鏡 (17-17)
 17号遺跡 変形半円方形帯画像鏡 (17-18)
 17号遺跡 変形六獸帯鏡 (17-19) * 伝-28-82に同一個体破片
 17号遺跡 擬銘帯画像鏡 (17-21) * 伝-28-82に同一個体破片

- 18号遺跡 獣文鏡片 (18-5-1)
 19号遺跡 変形内行八花文鏡 (19-1)
 21号遺跡 変形龍鏡 (21-1-3) *他の21号遺跡出土鏡より古い型式 21-1-aに同一個体破片
 23号遺跡 珠文鏡 (23-1)
 伝沖ノ島 方格規矩渦文鏡 (伝-4)

仿製鏡 (古墳時代中期前半～中頃)

- 伝沖ノ島 四乳渦文鏡 (伝-7-1) *主文は獣文
 伝沖ノ島 変形獣形鏡 (伝-8-3)
 伝沖ノ島 変形神獣鏡 (整理番号なし)

仿製鏡 (古墳時代中期後半～後期)

- 4号遺跡 外区片 (4-1-1)
 4号遺跡 外区片 (4-1-5)
 7号遺跡 珠文鏡 (7-2) *伝-9-1と同範・同型
 8号遺跡 変形文鏡 (8-2-1) *4-1-3・7-3-aに同一個体破片
 21号遺跡 変形格子目文鏡 (21-1-2) *21-1-b・21-2-bに同一個体破片
 21号遺跡 小型鏡 (21-1-14)
 21号遺跡 小型素文鏡 (21-2-2)
 伝沖ノ島 変形四神四獣鏡 (伝-8-1)
 伝沖ノ島 乳文鏡 (伝-8-2)
 伝沖ノ島 珠文鏡 (伝-9-1) *7-2と同範・同型
 伝御金蔵 乳文鏡 (所在不明)

仿製鏡 (時期不明)

- 4号遺跡 鈕 (珠文鏡) (4-1-4) *珠文が残る
 16号遺跡 素文雛形銅鏡 (16-2-3)
 18号遺跡 銅鏡片 (18-5-6) *盤龍鏡? 伝-7-2と同一個体と想定
 伝沖ノ島 四乳渦文鏡 (伝-7-3)

鏡式不明

- 7号遺跡 界圏片 (7-3-2)
 18号遺跡 外区片 (18-5-2)
 18号遺跡 鈕 (18-5-5) *獣文鏡 (18-5-1) の鈕でもよい
 19号遺跡 銅鏡片 (現存しない)
 21号遺跡 縁部片 (21-2-1)

唐式鏡

1号遺跡 八稜鏡片（1-1）

4号遺跡 唐式鏡片（4-1-2）

以上で、71面分を数えることになる。

（森下）

5. 成果と検討課題

今回の調査では、3回にわたって発掘・報告された沖ノ島出土鏡と、それ以外にさまざまな経緯で知られることになった鏡を合せて検討しなおした。破片の同定作業も行って、沖ノ島の鏡全体をとらえることをめざした。

その結果は表に示したとおりであるが、全体として沖ノ島出土鏡の特徴は次のようにまとめられる。

- ・古墳時代のほぼ全時期の副葬鏡が認められる。
- ・三角縁神獣鏡・仿製三角縁神獣鏡の占める割合が高い。一方、確実な漢鏡は1面のみ。
- ・魏晋鏡を中心とした三国鏡が一定量認められる。
- ・17号遺跡を中心として、前期の仿製鏡も種類・数量が豊富。
- ・中期後半～後期の仿製鏡の量も比較的多い。
- ・中期後半～後期の代表的な副葬鏡である同型鏡群が4面ある。
- ・唐式鏡も2面出土しているが、いずれも鏡片である。

三角縁神獣鏡と仿製三角縁神獣鏡の出土数が多いのは、北部九州の古墳出土鏡の傾向と一致する。また魏晋鏡の出土が多いのも北部九州の特徴である（辻田2007）。一方、大型品をふくむ前期の仿製鏡は北部九州の前期古墳からの出土は顕著でなく、沖ノ島鏡群の特徴といえることができる。

そのほかに注目すべき点として沖ノ島鏡群には5組の同範・同型鏡がふくまれていることが判明した。

- ・仿製三角縁神獣鏡 16号遺跡（16-1）と18号遺跡（18-2）
伝沖ノ島（伝-7-4）と伝沖ノ島（伝-6-1）
 - ・盤龍鏡 7号遺跡（7-3-1）と8号遺跡（8-2-3）
 - ・獣文縁宜孫子銘獸帯鏡 21号遺跡（21-1-1）と推定沖ノ島21号遺跡（個人蔵品）
 - ・珠文鏡 7号遺跡（7-2）と伝沖ノ島（伝-9-1）
- また同範・同型かどうかはわからないが、酷似する例の組もある
- ・夔鳳鏡 17号遺跡（17-1）と18号遺跡（18-5-3）

これまで沖ノ島遺跡の祭祀のあり方や変遷を論ずる場合、「16号遺跡」といった発掘調査時にとらえられたまとまりが、単位として扱われてきた。上記のように異なる「遺跡」から同範・同型品が出土していることから、「遺跡」の範囲と祭祀との関係を考え直す手がかりとなると考える。

沖ノ島が古代祭祀を研究する上で提起する問題は数多く存在する。今回の基礎的な調査・整理が、今後の研究の進展に寄与すれば幸いである。(重住、水野、森下)

註

- (1) 宗像大社復興期成会による神社史編纂事業の一環で、昭和29年・同30年に第1次調査、昭和32年・同33年に第2次調査、昭和44年～同46年に第3次調査が行われ、その成果は調査報告書『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』に収められている。
- (2) 沖ノ島に関する記録は江戸時代になって福岡藩が島に警備役を配置すると次第に現われてくる。祭祀奉納品に関する史料の初見は江戸時代初頭成立の貝原益軒の『筑前国統諸社縁起澳津宮御事略』で、御金蔵(4号遺跡)に関する記録は寛政6年(1794)青柳種信の『瀛津島防人日記』などがある。江戸時代の記録はいずれも御金蔵の存在をのべるに留めていて祭祀遺跡の実態や宝物の様子を詳しく表すものはみられない。
- (3) 御金蔵発見品を扱った論文は沖ノ島祭祀品を初めて学問的視点でとらえた江藤正澄の紀行文以降次々に発表されている(江藤1891、柴田1927、田中1935、豊1938・1939・1940a・b、梅原1940ほか)。
- (4) 多くの守備隊が駐屯していた戦時中や、昭和26年から20年近くかけて行われた島の漁港築堤工事の期間中など、大社神職以外の者の往来が激しくなった時期に、島からの持ち出しがかなりあったとみられている。
- (5) 『沖ノ島』や豊元国の論文(豊1939)には大社職員の来歴の談に異同がある旨、報告されている。しかし、明治7年に大社が福岡県へ提出した『筑前国宗像郡宗像神社所蔵古文書寶器什物目録』には既に中津宮の宝器として「一、古鏡 経(径)七寸七部(分) 黒田忠之奉納ト云傳フ」とあり、昭和27年大社の『神社財産台帳』にも同様の来歴が記されている。本鏡の来歴は一貫して同じ内容である。
- (6) 上高宮は古墳時代中期の宗像一族の古墳とみられ、鏡一面、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、銅鏃、短甲、蕨手刀子、玉類などが副葬品として確認されている。下高宮は古代の祭場とみられ、下高宮やその周辺からは滑石製模造品(白玉・人形・舟形・円板)、須恵器片、土師器片などが出土している(田中1938、宗像神社復興期成会1961b)。
- (7) 沖ノ島出土品の指定は学術調査終了後にその都度行われたが、調査年次によって文化庁の指定のあり方に違いがあったため、学術的価値が同じでありながら、国宝指定品、重要文化財指定品、未指定品が混在する状況となっていた。平成18年の一括国宝指定により、指定に差があるという不自然な状況が解消され重要な歴史の事象として等しい評価を受けた。なお、縄文時代、弥生時代の旧社務所前遺跡出土品並びに4号洞穴遺跡出土品と、4号遺跡出土品のうち平安時代以降の祭祀奉納品は指定対象外である。
- (8) その他、『東洋文庫所蔵梅原考古資料目録』Ⅲ 日本之部・中国之部(財団法人東洋文庫1993)に伝宮地嶽付近の古墳出土として収録され、花田勝広の論文(花田1999)によって推定沖ノ島出土と指摘されている画文帯同向式神獸鏡1面、変形獸帯画像鏡1面について、大英博物館所蔵品と確認した。

引用・参考文献

- 梅原末治1940 「筑前宗像神社所蔵の古鏡に就いて」『考古学』第11巻第3号 東京考古学会
- 梅原末治1966 「福岡県下出土の夔鳳鏡片」『九州考古学』第28号 九州考古学会
- 江藤正澄1891 「瀛津島紀行」『東京人類学会雑誌』第69号 東京人類学会
- 勝部明生1996 『海獣葡萄鏡の研究』 臨川書店
- 川西宏幸2004 『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築』 同成社
- 小窪和博・菅野宏一1987 『古鏡の美』 朝日新聞名古屋本社編集製作センター
- 小林行雄1965 「神功・応神紀の時代」『朝鮮学報』第36集 朝鮮学会
- 財団法人東洋文庫1993 『東洋文庫所蔵梅原考古資料目録』Ⅲ 日本之部・中国之部
- 柴田常恵1927 「沖ノ島御金蔵」『中央史壇』第13巻第4号 国史講習会
- 瀬戸内海歴史民俗資料館1983 『讃岐青銅器図録』
- 田中幸夫1935 「筑前沖津宮の石製模造品」『考古学雑誌』第25巻第2号 考古学会
- 田中幸夫1938 「官幣大社宗像神社邊津宮と祭祀遺跡」『考古学雑誌』第28巻第1号 考古学会
- 辻田淳一郎2007 『鏡と初期ヤマト政権』 すいれん舎
- 豊元国1938 「舟形石製模造品に就いて（其一）」『考古学雑誌』第28巻第9号 考古学会
- 豊元国1939 「官幣大社宗像神社沖津宮境内御金蔵発見の鏡鑑に就いて」『考古学』第10巻第2号 東京考古学会
- 豊元国1940a 「舟形石製模造品に就いて（其二）」『考古学雑誌』第30巻第2号 考古学会
- 豊元国1940b 「官幣大社宗像神社沖津宮境内御金蔵発見の金属製遺品に就いて」『考古学』第11巻第3号 東京考古学会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学総合博物館2000 『大古墳展』
- 西村俊範1983 「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』66巻1号 史学研究会
- 花田勝広1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』第148号 古代学研究会
- 樋口隆康・林巳奈夫監修2002 『不言堂坂本五郎 中国青銅器清賞』 日本経済新聞社
- 松浦宥一郎1983 「いわゆる仿製方格T字鏡について—桑57号墳出土の一面の小形仿製鏡を追って」『小山市史研究』第5号
- 松浦宥一郎1994 「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』第29号 東京国立博物館
- 宗像神社復興期成会1958 『沖ノ島』
- 宗像神社復興期成会1961a 『続沖ノ島』
- 宗像神社復興期成会1961b 『宗像神社史』上巻
- 宗像大社復興期成会1979 『宗像沖ノ島』
- （基盤研究A 研究代表：水野敏典）『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』（課題番号18202025）の研究成果報告書『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』（2010年3月刊行）より再録

【附記】

「沖ノ島出土鏡の再検討」と題する本報告は、2010年3月発行の『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成18年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号18202025）研究成果報告書（研究代表者：水野敏典、奈良県立橿原考古学研究所、2010年3月）に掲載されたものである（以下「2010年報告」と略述する）。重住真貴子・水野敏典・森下章司により、沖ノ島出土鏡および関連する宗像大社蔵鏡を総合的に整理して報告した。3次元計測画像や新規撮影写真を掲載し、沖ノ島出土鏡と関連鏡の全体を把握することができるようになった。新たに鏡式同定されたものや接合したものなどの知見を加え、沖ノ島出土鏡の鏡式構成の特徴についても触れている。

報告書は刊行部数が限られていたが、この研究成果と沖ノ島出土鏡・宗像大社蔵鏡の価値とに関する理解を広めることを目的とし、関係機関のご理解の上、『沖ノ島研究』本号におおむね原報告のまま再掲載できることとなった。

本報告を基礎として、その後も沖ノ島出土鏡の特徴や性格に関する新たな研究成果が発表されている。いくつかを附記として紹介し、沖ノ島出土鏡に関する研究の現状について触れておく。なお沖ノ島各遺跡から出土した鏡やその他遺物が、その場で「奉献」されたものか、あるいは祭祀後の片づけや収納に伴うものか、色々な議論がある（弓場2005ほか）。ここでは便宜的に鏡の「奉献」として記述する。また報告では「仿製鏡」と表現している古墳時代の倭で製作された鏡について、この文章では「倭製鏡」と言い換える。

沖ノ島出土鏡の追求 2010年報告では発掘調査出土鏡以外に「移管品」、「旧個人蔵品」、「来歴不詳品」など様々な経緯で宗像大社蔵鏡となった資料を紹介した。それ以外にも沖ノ島出土鏡の可能性のある資料が存在する。

花田勝広氏は、沖ノ島から「持ち出し」された可能性のある遺物を丹念に追求した。1999年の論考において鈴木基親氏蔵鏡が沖ノ島出土鏡である可能性を推定していたが（花田1999）、さらに鈴木氏所蔵に至る経緯や他の個人・機関との関係について詳細に検討した（花田2012）。その中で、古くに梅原末治氏（梅原1966）によって「伝宮地嶽付近の古墳」出土鏡として紹介された4面の鏡、①画文帯重列式神獸鏡（同型鏡群 20.7cm 現British Museum蔵）、②変形獸帯画像鏡（倭製鏡 18.2cm 現British Museum蔵）、③方格規矩四神鏡（推定直径14.0cm 所在不明）、④八鳳鏡（鏡片 所在不明 18号遺跡出土鏡18-5-1-3と同一個体と推定）についても、さまざまな状況から沖ノ島からの持ち出し品の可能性がきわめて高いと考えた。

これらの鏡が沖ノ島出土鏡であるとする、①の同型鏡群が計5面（盤龍鏡2面を同型鏡群と推定）に増え、②が比較的大型の前期倭製鏡であることなど、沖ノ島出土鏡全体の特徴として言及した内容がさらに強まることになる。④は17号遺跡出土の変形夔鳳鏡と同範・同型品の可能性が指摘されてきた資料である。主要図像は呉～西晋代の夔鳳鏡と同一形式であるが、外区に内向鋸歯文を二重に巡らす例は中国出土鏡にも見出していない。同範・同型品ではなかったとしても、そうした珍しい特徴をもつ2面がまとまって沖ノ島にもたらされていたことになる。

沖ノ島鏡出土の特色 2010年報告では沖ノ島出土鏡全体の特徴として、A：三角縁神獸

鏡・仿製三角縁神獸鏡、B：魏晉鏡、C：大型鏡をふくむ前期の倭製鏡（報告では「仿製鏡」）、D：中期後半～後期の倭製鏡と同型鏡群のそれぞれが多いことを述べた。Cが九州の古墳出土鏡と異なることについても指摘した。

下垣仁志氏も沖ノ島出土鏡のきわだった特徴として、前期倭製鏡の大・中型鏡がかなり多いことを重視する（下垣2018）。沖ノ島をのぞく九州北部出土倭製鏡の内容が、面径において奈良・京都・大阪地域の古墳出土鏡に及ばないことを数値によって具体的に示し、沖ノ島出土鏡とのちがいを強調する。倭製鏡の充実した内容に比して、明確な漢鏡がとぼしいことにも着目する。

漢鏡 2010年報告では上のA～Cの鏡式の多さと対照的に、漢鏡は18号遺跡の獸帯文方格規矩四神鏡（18-5-4・伝-2）1面に限られることを記した。柳田康雄氏はこの鏡を詳細に検討し、鏡縁や鈕・乳の特徴から後世の踏み返し鏡と想定している（柳田2011）。同型鏡の存在が確認されていない状況では断定がむずかしいが、本鏡が踏み返し鏡であるとすれば沖ノ島鏡に明確な漢鏡はないことになる。また踏み返し鏡が同型鏡群であるとすれば、18号遺跡出土鏡には、今まで知られていた鏡群より大幅に降る時期の鏡も奉獻されていたことになる。

鑄掛けの鏡 やや細かい話になるが、2010年報告では17号遺跡出土倭製鏡の変形珠文帯方格規矩鏡（17-6）に鑄掛けがあることを指摘した。岩本崇氏は古墳出土鏡の鑄掛け例を集成し、各時期の倭製鏡にみられることを示す（岩本2021a）。かつて原田大六氏は17号遺跡出土鏡を報告するにあたり、その製作工程などを詳細に検討し、鑄造技術の特徴として鈕孔の丸味や「湯冷え」、鑄造や型の欠陥などが多くみられることを指摘した（原田1961）。改めてその結果をみると、倭製鏡に関しては大型品に欠陥が見当たらず、中小型品に多いという傾向が顕著である。上記の鑄掛けも、沖ノ島出土鏡の中小型倭製鏡の特徴のひとつに含められる。

鏡奉獻の時期・段階 近年の精緻な倭製鏡編年成果に基づき、沖ノ島出土鏡の個別資料の時期比定が進められた。下垣氏は編年整理の結果から、各遺跡を第一期：古墳時代前期末葉～中期初頭（18・17号遺跡などI・J・K号巨岩の出土鏡）、第二期：中期中葉頃から後葉頃（数の少ない停滞期）、第三期：後期前葉頃～中葉頃（21号遺跡ほかF・D・B号巨岩出土鏡）の3時期にまとめ、巨岩ごとに出土鏡の時期的なまとまりがあるとした。第一期については、17号遺跡の大型倭製鏡などの特徴が畿内の有力古墳との共通性が強いことを重視し、その奉獻も畿内の有力集団が関与したものとみる。第三期については九州の勢力との関りにも留意し、鏡の祭祀が活発化した背景として朝鮮半島との政治関係を想定する。

岩本崇氏は自身の倭製鏡年代観をもとに、様相①（前期倭製鏡の大型鏡を主体とする鏡群構成 17号遺跡）、様相②（氏の分類による後期倭鏡新段階を主体とする鏡群構成 7号遺跡）、様相③（各時期の倭製鏡が併存する鏡群構成 21号遺跡）に整理する（岩本2023）。様相③で時間幅のある構成にもカテゴリーを与えた点が特徴であり、複数回の奉獻の累積によって形成された可能性が高いとみる。また三角縁神獸鏡・仿製三角縁神獸鏡の年代についても検討し、17・18号遺跡の形成時期となる第1期は「帯金式甲冑の出現時

期と重なる」「中期前葉古相」であり、暦年代を4世紀第4四半期と位置づける。そして数量が減る第2期の変質期を経て、同型鏡群など奉献鏡の数・質が復活・再興する第3期への流れを描く。岩本氏の第3期が倭製鏡の年代観から「古墳時代後期後葉（≒TK四三型式段階）」とすることにはとくに注目しておきたい。

奉献の実態 以上のように鏡の精細な編年研究を通じ、古墳編年や暦年代研究の成果もあわせて、鏡奉献の時期について精密な年代的検討ができる段階となった。一方で各「遺跡」から出土した遺物のまとまりや奉献の状況との関係も改めて問題となる（篠原2011）。

17号遺跡出土鏡の印象的な鏡集積状況は、原田大六氏の残した精密な記録の検討からも、一括して奉献された状況を示すものとみなされる（岩本2023、下垣2018）。一方、17号遺跡以外の鏡出土遺跡については、上記の岩本氏の様相③のように、複数回に及ぶ奉献や奉献後の移動などを想定しておく必要もある（辻田2012など）。各遺跡出土の鏡やその他の器物のまとまりが、特定の時期にまとめておこなわれたのか、異なる時期の追加やそれほど多くない数量の奉献が積み重ねられた状況があったかどうかとも問題である。奉献回数や一回に奉献された器物の数量の評価は、祭祀・奉献の契機が何であったのかという問題とつながる。外交などに関わる重大な契機に多数の器物がまとめて奉献された場合や、航海や季節ごとの奉献が蓄積された場合などが考えられ、沖ノ島祭祀の性格への理解と関係する。

奉献の主体 銅鏡に代表される数多くの豊富な器物を沖ノ島に奉献した主体となる勢力を何処に求めるか、当初から議論がおこなわれてきた。第3次調査報告の総括を記した岡崎敬氏は、沖ノ島や宗像地域の各時代の遺跡を総括的に整理したうえで、4世紀末から5世紀代における大和朝廷の海外交渉の進展の中で、「大陸との交渉を扼する胸方君のまつる宗像三神は大和朝廷のまつる神」となり、「新しい祭儀と奉献品をもってまつられるようになった」と述べる。中央との新たな関係性の展開についても重視しつつ、奉献の主体を宗像の勢力と想定している（岡崎1979）。

こうした宗像の在地勢力と鏡との関係については、津屋崎古墳群や新原・奴山古墳群など宗像地域の古墳群や集落遺跡の調査の進展が注目される（花田1999・2012 小田2011）。とくに重要な材料を提供したのが福津市勝浦峯ノ畑古墳である。墳長94.5mの前方後円墳であり、石柱をもつ横穴式石室を有し、鏡や冠帽など豊かな副葬品が確認された（池ノ上・吉田編2011）。鏡については再整理の結果8面もの数に復元され、そのうちの3面が同型鏡群の鏡であった（辻田2011 岩本2021b）。同型鏡群の多さは上記の沖ノ島出土鏡の特徴と通ずる。中期中葉から形成される新原・奴山古墳群があることも注目すべきであり、この時期から宗像の勢力の新たな伸長が想定できる。

辻田淳一郎氏は勝浦峯ノ畑古墳出土鏡などから、沖ノ島では21号遺跡が画期となり、それ以降は宗像地域など在地の古墳出土鏡との共通性が発生するとみる（辻田2012・2018）。鏡だけでなく滑石製品の製作地など他の器物の研究成果も考慮している。

こうした見解を受けて下垣氏は沖ノ島への鏡の「奉献」者として「在地集団の積極的関与を強調する見解がますます前面化」していると述べ、「この主張はおおむね是認できる」としながらも、「鏡の入手・製作主体は畿内中枢勢力だと想定できる以上、在地集団の主体性を強調することには一定の留保をもとめたい」という。宗像以外の北部九州の有力者

集団の関与も考慮すべきとする（下垣2018）。

岩本氏は17・18号遺跡出土鏡の量・質は他とは一線を画しており、「沖ノ島祭祀の成立は王権の直接的関与によって達成された可能性が高く、王権の関与は時期を追って在地勢力を介した間接的な内容にシフトしていった」とする。そして奴山正園古墳との共通点などから、「変質期」に沖ノ島祭祀への在地首長の関与の発生を想定し、「再興期」とされる後期後葉には津屋崎古墳群の首長墓がふたたび拡大傾向にあることから、在地勢力が深く関与した可能性をみる（岩本2023）。

長期にわたって奉獻が継続した器物として、鏡の検討から沖ノ島祭祀のダイナミックな歴史的推移が描き出される段階となってきた。もちろん鏡の分析だけで結論が出る問題ではなく、他の器物との総合的な検討の進展が期待される。

なお、2010年報告には、本再録の付属資料として、沖ノ島出土鏡および関連する宗像大社蔵鏡の各個体にかかる基本情報をまとめた「資料目録」と、カラー写真と3D画像を掲載した「資料図版」がある。これらの付属資料については、本誌への掲載が叶わなかったため、令和6年度からWebサイト「MUNAKATA ARCHIVES」で閲覧できるよう進めている。

（福岡（重住）真貴子・宗像大社文化局、水野敏典・檀原考古学研究所、森下章司・大手前大学）

附記引用・参考文献

- 池ノ上宏・吉田東明（編）2011 『津屋崎古墳群』Ⅱ勝浦峯ノ畑古墳、福津市文化財調査報告書第4集、福津市教育委員会
- 岩本 崇2021a 「古墳時代倭鏡の鑄掛け」『昼飯の丘に集う一中井正幸さん還暦記念論集』、「中井正幸さんの還暦をお祝いする会」事務局、23-32頁
- 岩本 崇2021b 「福岡県勝浦峯ノ畑古墳出土鏡群の再検討」『社会文化論集』第17号、島根大学法文学部社会文化学科、43-54頁
- 岩本 崇2023 「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」『沖ノ島研究』第9号、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、1-28頁
- 梅原末治1966 「福岡県下出土の夔鳳鏡片」『九州考古学』第28号、九州考古学会、2-4頁
- 岡崎 敬1979 「宗像地域の展開と宗像大神」『宗像沖ノ島』、宗像大社復興期成会、452-480頁
- 小田富士雄2011 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討—4～5世紀宗像地方との関連で—」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、39-70頁
- 小田富士雄2012 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅱ-1、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、1-41頁
- 小田富士雄2013 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討3」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅲ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、1-42頁
- 笹生 衛2011 「沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造—鉄製品・金属製模造品を中心に—」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世

界遺産推進会議、297-328頁

- 篠原祐一2011 「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、329-367頁
- 下垣仁志2018 「沖ノ島の鏡」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学・別冊27、雄山閣、33-39頁
- 第15回九州前方後円墳研究会北九州大会実行委員会 2012 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』
第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集
- 辻田淳一郎2011 「鏡」『津屋崎古墳群』Ⅱ勝浦峯ノ畑古墳、福津市教育委員会、40-44頁
- 辻田淳一郎2012 「九州出土の中国鏡と対外交渉一同型鏡群を中心に」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集、75-88頁
- 辻田淳一郎2018 『同型鏡と倭の五王の時代』、同成社
- 花田勝広1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』第148号、古代学研究会、1-13頁
- 花田勝広2012 「宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』
第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集、1-74頁
- 原田大六1961 「十七号遺跡の遺物」『続沖ノ島』、宗像神社復興期成会、28-112頁
- 宗像神社復興期成会1958 『沖ノ島』
- 宗像神社復興期成会1961 『続沖ノ島』
- 宗像大社復興期成会1979 『宗像沖ノ島』
- 柳田康雄2011 「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、369-396頁
- 弓場紀知2005 『古代祭祀とシルクロードの終着地 沖ノ島』シリーズ「遺跡を学ぶ」013、新泉社